



# ほっかいどう学新聞

第12号  
2023秋号

厚真町長に聞く

## 北海道胆振東部地震から5年 生産空間を取り戻す インフラ復旧の軌跡

厚真町長の宮坂尚市朗さんは、こう振り返る。「明治以来最大規模の土砂災害でした。約9,000年の間、安定していた樽前山や支笏カルデラの噴出物が崩れたのです。尊い命が犠牲になりました。これまで積み上げてきた生産空間も失われてしまいました。人間は何でもできるのではないのだと思い知らされ、自然を、地球を学ぶ大きさを痛感しました」。

山の斜面の崩落は約4,300haに及び、その75%を厚真町が占める。とりわけ対策に急を要したのは、崩れた山の土砂で日高幌内川が1,100mにわたって堰き止められ、上流部に水が溜まって天然ダム湖ができてしまつたこと。「万一日が壊れて天然ダム湖になだれ込んだら、大量の水と土砂に下流の市街地が襲われます。なんとかしなければ。でも、こんな大規模な



町長室には被災木を活用したコロナ感染防止のつい立てが置かれていた。



被災者として災害を語り継ぐことを使命とする厚真町長の宮坂さん。

河道閉塞の経験などありませんでした。国が主導した技術検討会で学識経験者から意見を聞き、ヘリと地上から確認し、天然ダム湖まで運搬路を造りました。電源も電波も届かないところですから、ソーラー発電と衛星電波で監視カメラや水位計を作動させて監視を続けながらの作業です。そしていつ壊れても最小の被害ですむよう、堰堤(砂防ダム)を造つてから、河道を成形していくのです。道なき道の資機材の運搬には車輪ではなくキャタピラーで走行する特装車が使われた。24時間体制の作業で、10日で土砂撤去を終えた。この他にも道道、町道の道路啓開や応急復旧にも地元の建設会社が総力で取り組んだ。

農地と農業施設の被災は、500haに上り、丹精込めて育てた作物が、収穫直前に壊滅的打撃を受けた。そればかりか農地に土砂がのつたままで

NOTICE

ほっかいどう学 前進中! ※以下、肩書きは開催当時のものです。

### ①第5回ほっかいどう学シンポジウム 開催報告

7月28日(金)に5回目となるシンポジウムが開催されました。今回は「教育と土木でつくる北海道の未来—高校生、動く、考える!!」をテーマとして、高校の動きに着目。基調講演では、林正憲様(前北海道札幌北高等学校長)をお招きし、社会に開かれた学校教育の重要性を講演いただきました。続くパネルディスカッションでは、佐藤豊記様(北海道高等学校遠隔授業配信センター次長)、萩原一利様(帯広建設業協会・萩原建設工業(株)代表取締役社長)、近藤里史様(空知建設業協会・(株)砂子組専務取締役)にご登壇いただき、企業と学校との連携の先進的な取り組みについて話題提供いただきました。北海道の人材育成に向けて、それぞれの立場でできることを改めて考えた場となりました。



第5回 ほっかいどう学シンポジウム

### ②令和5年度(2023年度)第5期通常総会 開催報告

シンポジウムと同日に令和5年度(第5期)通常総会を開催しました。正会員の皆様のご協力により、ほっかいどう学新聞の季刊誌化や、小学校向けのデジタル教材(副読本、スライド、動画クリップなど)の作成など、今期事業計画を含む全議案について原案とおりご承認いただきました。引き続き、会員の皆様の応援をいただきながら活動を推進してまいります。

### ③教員&開発行政&技術スタッフで「第1回全道みち学習交流会」を開催

7月29日(土)に(一社)北海道開発技術センター(通称dec)、当法人の主催により、「第1回全道みち学習交流会」が開催されました。道路をはじめとするインフラを小中学生に学んでもらう「みち学習」の活性化を目的として、全道10地域から学校教員、開発行政担当者、技術スタッフ40名が一堂に会し、情報共有、意見交換を行いました。出席者からは各地で開発されたみち学習の普及・一般化に向けて様々なアイデアが出されました。ほっかいどう学の推進に向けて、今後もこうした交流の場を増やしていきたいと考えています。



第1回 全道みち学習交流会 意見交換の様子



第1回 全道みち学習交流会 記念撮影

※以上のセミナー等の詳細は、ほっかいどう学HP(QRコード)からご覧ください。→



### 会員募集中 一緒に「ほっかいどう学」を創りましょう!

ほっかいどう学を応援してくださる皆さん、ぜひ、当法人へのご入会をご検討ください。会員の皆さんには、この「ほっかいどう学新聞」を郵送でお届けするとともに、各種情報(セミナーやインフラツアーや開催案内等)をメールにて最速でお知らせします。ご入会の案内は右のQRコードよりご覧いただけます。



ほっかいどう学新聞 第12号 2023年9月30日発行

発行人/新保 元康、編集人/北室 かず子、編集スタッフ/原 文宏 宮川 愛由 森 希美、デザイン/スタジオコロール  
発行所/認定NPO法人 ほっかいどう学推進フォーラム 〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17  
TEL(011)738-3363 FAX(011)738-1889 URL https://hokkaidogaku.org E-mail info@hokkaidogaku.org



2023年9月に上厚真小学校で行われた防災学習。北海道胆振東部地震の被害状況や復旧対策等について、厚真町の担当者が6年生に語った。

経験した地域の学校における防災教育ですから、全ての児童が自分事として課題を捉え、課題解決に向かう内容であることが大切だと考えています。各学年の学習活動では、自分たちの身の回りや地域の実態等を調べ、必要なことを考える学習となつております。児童が『自分の立場』で『自分にできそうなこと』を考える活動となつています」。

書対応の仕組みを知り、その上で災害に強いまちにするにはどうしたらよいのかを考えます。そして模擬選挙を行ない、保護者等が投票するという実践的な内容になっています」とのこと。

宮坂さんいわく「子どもが防災の伝道師となることで、お年寄りも耳を傾けてくれます。わずかな時間にどう行動するか。消防や自衛隊が機械力で救い出してくれるまでの数時間を見、どう命をつなぐか。命を守るために行動は、寝室のタンスの配置から始まっているのです」。

巨大な山が崩落したことで被災したダムなどの復旧は今年度中で完了します。しかし宮坂さんはこう語る。「森林が再生しないと土砂の流出が止まりません。漁業への被害が出ないよう、令和8年度くらいまでに集中して植林し、被害木も回収してお金にしま

命を守る学び

町の上厚真小学校では、学年ニーネクな学びが行われている。校長の清水京子さんはこう語る。「大きな災害を経験した地域の学校における防災教育ですから、全ての児童が自分事として課題を捉え、課題解決に向かう内容であることが大切だと考えています。各学年の学習活動では、自分たちの身の回りや地域の実態等を調べ、必要なことを考へる学習となつており、児童が『自分の立場』で『自分にできそなうこと』を考える活動となつています」。

誠之さんによると、児童はこうした活動に積極的に取り組んでいるそうですが、6年生になると、行政の災害対応について役場職員へインタビューし、災害対応の仕組みを知り、その上で災害に強いまちにするにはどうしたらよいのかを考えます。そして模擬選挙を行い、保護者等が投票するという実践的な内容になります」とのこと。

宮坂さんいわく「子どもが防災の伝道師となることで、お年寄りも耳を傾けてくれます。わずかな時間にどう行動するか。消防や自衛隊が機械力で救い出してくれるまでの数時間を、どう命をつなぐか。命を守るための行動は、寝室のタンスの配置から始まっているのです」。

巨大な山が崩落したことで被災したダムなどの復旧は今年度中で完了します。しかし宮坂さんはこう語る。「森林が再生しないと土砂の流出が止まりません。漁業への被害が出ないよう、令和8年度くらいまでに集中して植林し、被害木も回収してお金にしま

# 子どもたちに **ココを** 伝えたい

- 上厚真小学校の子どもの発達に応じたカリキュラムは非常に勉強になりました。「自分事として」「自分の立場で」「自分にできそうなこと」という重要なキーワードをどの学校でも大事にしたいものです。気象変動などによる災害の激甚化も頻発する中で、命を守るための学びを紡ぎ続けることが学校の最大の役割なのだとと思いました。
- 防災教育の原点は、「知ることだと言います。北海道胆振東部地震では、「約9,000年にわたり安定していた樽前山や支仏カルデラの噴出物が崩れた」という宮坂町長のお話に本当に驚きました。「人間は小さい、地球は大きい」とつくづく思います。この事実から恐怖を超えた自然への畏敬の念を学ぶことも防災教育の原点ではないでしょうか。
- そして、人のすごさを子どもたちに希望として伝えたいと思います。大災害を超えてわたしたちは、慰めあい、支えあい、祈り、直し、前進しています。未来への希望までつなげる防災教育をぜひ考えたいものです。

まだまだご苦労が続く中で取材にお応えいただいたみなさん、本当にありがとうございました。

理事長：新保 元康  
(元札幌市立小学校校長、専門は社会科)

ない。この複雑なやりとりで力を発揮したのが、各機関から派遣された「リエゾン」（フランス語で「連携」、「橋渡し」の意味）の存在だったという。

難するなか、職員が、先手先手で対応することができたのは、「研修の成果」と、宮坂さんは言う。定池さんは北海道胆振東部地震の翌日には仙台から北海道庁に赴き情報共有した後、翌日に厚真町へ入つて応援県や関係機関との連携を支えた。

マップを作っている。4年生は「防災グッズを見直そう」と題して、学校にある防災グッズや備蓄品を調べ、他に必要なものはないか提案する。定塚さんからアドバイスをもらい、町の防災備蓄倉庫に赴き、自分たちの提案との比較も行う。5年生は「災害から身を守るために」をテーマに、地域で起こる

す。人の手で植えられるところは植えて、人が入れないところは自然治癒化、そして被災者の心のケアはまだ当な時間を要します」。

天災はそれ自体を防ぐことはできい。しかし災害時のリーダーシップと各機関の情報共有、連携の仕組みつ

りによつて、復旧への時間を早め、爪痕を浅くすることがわかつた。

気象変動による災害が増え、日本海溝・千島海溝沿いの巨大地震への被害想定も公表されたなか、一人一人が災害に強い暮らしを考え続けなければならぬと、取材を通して強く思つた。



幌内川(厚真町幌内地区)。  
提供=北海道開発局;平成30年9月8日撮影



関連緊急治山工事現場(被災時の厚真町吉野地区)。  
提供=北海道:平成30年10月3日撮影



川(厚真町幌内地区)。  
提供=北海道・平成30年9月9日撮影

害を受けた吉野地区と富里地区の土砂は日高幌内川上流部の埋め立てに利用された。「被災地の土砂は、よそへ搬出されるのがふつうです。でも地域内で使えたため、運搬の時間もコストも節約でき、工期が奇跡的に短縮できました」と思っています。それが可能になつたのは、土砂を運ぶスペースを農家が貸してくれたおかげです」。

「はじめは手作業で洪水吐にたまつた土砂を上げていきました。自衛隊の支援を受けて、厚真ダムから厚幌ダムへの道路が通れるようになつたのです」。厚幌ダムは、平成30年5月に竣工して8月に試験湛水を終えたばかりだった。そこに大量の土砂や倒木が流入してダム機能が低下した。それらを除去するとともに地すべり対策や法面対策が行われた。

厚幌導水路の工事は、地震前に約95%が完成していた。ところが地震によつて管の離脱、地面の沈下、法面の崩落などが起きた。管内は破断やクラックが発生。離脱箇所から地下水や土砂が流入した。「離脱してしまつた管は全部はすして、抜けにくい管を設置し直しました。大きな径の区間は人が歩き、末端はロボットを操作して、約18kmにわたつて手探りで調べていきました。途中でサイフォンになつて川を潜るところもあり、ものすごい機能を詰め込んだ事業が、本当に完成直前に大きな被害を受けました」。令和4年7月までに本体工事は完了。今年度

TEC - FORCE の歴史

5年遅れの令和6年6月に事業が成する見込みだ。

このように生産空間のインフラはひとたび被災すると復旧までに多大時間とコストがかかることがわかる。北海道には、農林水産業の豊かで広な生産空間がある。その恵みを享受続けられるよう、知恵を出し合って決していくみたいのだ。

## TEC - FORCE の 働 ん

者がいない地方の大災害を乗り越えることができました」と感謝するのが、国土交通省の「TEC-FORCE」(緊急災害対策派遣隊)の働きだ。大規模な自然災害時に、被害状況を迅速に把握し、被害の拡大を防ぎ、早期復旧のために地方公共団体を支援するものだ。北海道胆振東部地震では被災市町に、北海道開発局と全国の地方整備局から約3,064人が派遣されてきた。

「厚真町役場の技術担当職員は4人のみです。被害状況の把握さえ困難なんか、災害復旧作業の査定を受けるための調査を行い、それを町にプレゼントしてくれたのです」。